

幼児の發育の季節的變動について

(一) 幼稚園 兒

お茶の水女子大学児童研究室

平 井 信 義
千 羽 喜 代 子
野 田 幸 江

小児の發育に及ぼす影響は種々なる条件があるが、季節が小児の發育に如何なる影響を及ぼしているであろうか。従来、学童については若干の研究があり、その一つとして、春即ち男児では4—6月は女児では3—5月には身長が増加が著しく体重の増加が思わしくないのに対し9—11月は体重も増加が非常によく、反対に身長が増加が悪い——という結論が出されている。之に対しては勿論反対もあつたが、我が国ではさかんに引用され教科書などにさえしばしば載せられている程である。

乳児についても若干の研究があるが、之らの多くは季節的な影響を否定している。即ち、乳児期に於ては、余り強い季節的影響を受けない様だ、というのがその結論であるが、之については今日なお検討の余地があり、目下調査をすすめている。

しからば、乳児と学童との中間にある幼児期には、いかなる傾向が見られるであろうか。我が国に於ては、迫田マツ氏、齋藤、辻両氏中鉢二郎氏らの研究があるが、それらは学童期に認められた春

には身長が増し、秋には体重が増す、という傾向を幼児期にも認めているが学童期ほど顕著ではないといつてゐる。即ち、乳児期と学童期の中間的な傾向を認めている。

茲に我々は、特に幼稚園児を対象として、その發育に及ぼす影響をみたのであるが、今回は、その整理のみに了つた。目下保育所児との比較や、家庭児との比較について調査中であるが、更には月間發育量の個人的差異——即ち、季節的影響を受ける子供と受けない子供との類型を求めようと試みたいと思つてゐる。

(研究 方法)

対象としては、都内某幼稚園2箇所の協力を得て、昭和25年度即ち昭和25年4月より、昭和27年3月までの2年間、男女合計一七八名(内訳は、五才児一一五名、四才児五三名男女略同数)について身長、体重を毎月計測した値を整理したものである。但し8月は夏休みのため計測値がない。

研究方法としては、対象児数も少く、計測に当つては当該幼稚園の先生に依頼したから若干の誤差も免れ得ず、従つてこゝに表れた結果をもつて全体を推すことは危険であるので、目下更に調査をすめて居るが、茲に中間報告の形で発表した次第である。

(研究成績)

先づ身長の発育であるが、五才児は男女とも月を逐うて順調に発育している。これを3ヶ月区分4期に分けて検討すると、男女とも十〜十二月が最もよく、一〜三月が最も悪い。次に四才児であるが、四月から七月までの発育は非常に悪い。身長が下降するという事は計測に誤謬のあることも考えなくてはならないが、いづれにせよこの間の発育が悪いことは言えると思う。しかしながらその後夏休み間の発育は、春に於ける発育不振を一挙にして取戻した如きよい発育振りを示しておる。ところが9月になつて幼稚園が始まると再び発育は徐々となり、冬即ち一〜三月に及んでいる。

以上、五才児の身長は秋に増加がよく冬にはやゝ増加が思わしくないが各期とも順調な発育を示しているといえよう。ところが四才児は夏休みを除いては発育が思わしくなく、これが如何なる原因によつて起るかについては、今後更に検討しなければならぬことである。他とも比較検討して次回に発表する予定であるが、これを以て四才児の幼稚園生活が荷重であるというのは早計であらう。

体重の発育は、四〜五月の発育が各年令男女とも思わしくない点については注目する必要がある。特に五月は我々小児科医の立場からは、いろいろの問題を持ち込まれることの多い月である。しかし、

その後六、七月と稍挽回して夏休みを迎えている。問題はこの夏休みで、五才児、四才児ともに体重増加は思わしくなく、五才児ではむしろ減少している様である。ところが九月から十一月乃至十二月の発育は誠によい。各年令、男女ともぐんぐんと太つて来ている。その後一〜三月はむしろ発育がよくない。殆どその間は停止した様な状態となつてゐる。

以上のことから、体重の発育は先づ五月に低下する。その意味は新入園や新しいクラス構成、その他で先生、子供ともども影響を受けるのではないかとし、その後七月まで上昇の傾向があるが充分ではない。そして夏休み間は更に発育が悪い。その意味は、高温、高湿度による身体疲労、食欲不振、病気などが上げられようし、それに反して子供の活動の過剰も考えられる。秋の発育は素晴らしい。身長も発育とも考え合わせ秋の健康保育を最も充実したものにした。秋は冬の準備期でもあるからである。そして冬の沈滞した発育に耐えたい。

次にどんな子供が季節の影響を強く受けどんな子供が受けないか之らについて整理してみたが、今日のところ、思う様に、その型が出て来ない。私共臨床にたづさわつてゐる者としては、先に述べた平均値よりも、個々の子供の型を知つて、その型に沿つて指導を行いたいのであるが、今回は尙十分に検討し得なかつたので、次回にゆづりたいと思う。

発育ということとは子供の中心課題であるが今日尙不明の点が沢山ある、発育の中心課題としては栄養、養護、生活などもあるが内分泌学的な諸問題も残されている。今後研究をつづけていくが、多く

の御援助をお願いする次第である。

本研究に当つては、終始御指導を賜つた愛育研究所長齋藤文雄博士、並びに我々の研究に御協力下さつた、一番町幼稚園徳久孝先生

はじめ諸先生、常盤幼稚園麦倉先生はじめ諸先生に、この壇上を拝借して厚く御礼申上げます

知能検査としての指テストの検討

愛知学芸大学

一宮市浅野保育園

種 橋 正 徳
野 崎 と し 子

(他二名)

研究の動機及目的

現在までの知能テストは、その殆どが、絵、文字、文章、数などを用いている。然しこれらに比較的接する機会のない人々にとつては、応々にして不備な点があるものと考えられる。

九州大学精神科中教授は、その点に関して知能は絶対環境の産物であり、又知能は大脳皮質の参与する生物の精神能力で、物と物との差の識別の際に仍くような能力であると言ふ立場より、特に小児

期の知能テストには、大脳皮質の機能検査時に大脳の運動中枢及び感覚中枢の発育を示すようなテスト方法が最も適当でないかと考える。次の十種類の指及び前肢の運動からなる方法を推奨している。

又保育者にとつては、時間と道具と、相当高度な技術を必要とするため、現在の知能テストは、二の足を踏むと云われているが、この点についても指テストは、何等の問題はないと思われる。故に本テストを実用化するためにこの研究を始めたものである。目的として、(1)本テストと現行知能テスト(鈴木ビネー式を選ぶ)との相関